

## おわりに

今期の提言「だれもが独りにならない地域社会をめざして～さらなる多様なつながりによる教育コミュニティづくり～」では、孤立している人ができる限り少なくなるように、(ア) 学校・家庭・地域が協働して、教育コミュニティづくりの取組みを進めることにより大人のつながりを広げ、強めることの重要性、(イ)「学びあう」ということを通じて地域の人々のつながりを強めてきたという社会教育の「得意技」を活用することの有効性について述べてきた。

「だれもが独りにならない地域社会」とは、あらためて表現すると、地域課題の前で一步踏み出すことを躊躇していた人や関心を持たずにいた人が気づき、学ぶことにより、できること気になることから始める、という「学び」と「実践」が繰り返され、地域の教育力が向上している社会である。

地域では人材が育たないとか、人材が足りないというような声を聞くが、本提言を策定するにあたり、地域で行われているさまざまな事例を調査していくうちに、地域にはさまざまな趣味や文化活動、仕事などを通じた豊富な経験や知識・能力を持つ人材やそのような人々のネットワークが存在することがわかった。

そのような人材が自主的に地域活動に参加することが理想であるが、時間がない、関わる方法がない、きっかけがないなど、さまざまな理由によって、地域活動に踏み込めず、躊躇している人が多くいるのではないだろうか。そのような人たちに働きかけ、社会教育行政が地域活動に参加してみようと思えるような仕掛けをつくっていくことが重要だと考えている。

今期の提言では、このような仕掛けとして「相互学習できる場をつくり、さまざまな活動主体をつなげる」という社会教育の「得意技」を活かしつつ、学びから実践につなげていく実践プランづくりを提案した。

今後、市町村においては教育コミュニティづくりの取組みをさらに進め、子どもの学びを支援し続けることに加え、市町村・地域の実情にあわせて課題を絞ったうえで、実践プラン(例)を参考にして、社会教育が取り組むことがで

きる範囲で、地域の既存組織や社会福祉協議会、ボランティアセンター、市民活動センター、NPOなどと協働して「気づき」から「始める」までのステージを意識したプランづくりを進めてもらいたい。府内各地でそのような取組みが進み、「学び」と「実践」が繰り返されるような動きが広がることを願ってやまない。

なお、このような地域の教育力の向上を図る取組みは、人々の意識の変化を前提とした働きかけであり、その浸透には相応の時間がかかるものであることから、長期的に継続する取組みとなることを期待したい。